

みな、これは自分の心の迷いから見ることである。牛の角はつねに見慣れているから、恐れることはないけれども、鬼の角は見たことがないので恐れる。みな心の迷いである。

さてまた、化け物の風袋（入れ物）を引いた正味（中身）の化け物は人である。今日、夫に牙あるとも知らず。女房にとがった角が二三本あつても、ふだん隠して見せなければ、知らず。

また、人が人を化かすことは、狐や狸の及ぶところではない。人の化け物ほど、世に恐ろしいものはない。けれども、つねに見慣れて、恐ろしいとも知らぬが仏である。

さてまた、化け物を見る人は、生まれつき強気の者である。臆病者や、生まれつき柔弱な者を見ることがない。

これは、どういふことかという、化け物が言うのには、

「闇夜に森々とした墓所などで、気持ちよく化けて、だれかに見せようとする、臆病者は二目も見ないで逃げ走る。あるいは、なまくら（切れない刀）などを抜いて振りまわす。あるいは、石つぶてなどをやたらに投げ付けるので、油断ができなくて、思いのままに化けることができない。とにかく、臆病者に化けて見せることは、化け物仲間の法度（禁止）である。

気の強いのは、石つぶても投げず、なまくらなどを振りまわすこともなく、振り返つ

て、さし覗いて、念を入れて見るので、化け力も出て、いろいろさまざまに早変わりなどして楽しむことができる。臆病者には、油断するな」とは、ももんがの親玉がつねにおっしゃられていることである。

\*1 見越入道 首が長く、背丈が非常に高い入道姿の化け物。

\*2 ももんが ムササビに似た形の動物。「ももんがが」と言つて、着物をかぶつて、ひじをはつて、子どもをおどす遊びがある。化け物の一つか。

### 四十三 馬下何某、化け物を見ること

一

御守町に馬下何某という者がいた。もともと上気の症であるのか、若い時から化け物を見ることが常であつた。そのため、見ても怪しいともしないし、恐ろしいと思わず、また求めて見ようと思うこともない。

雨の夜、悪路に下駄や足駄を踏みこんで、片足になってしまつて、振り返つて見ると、足駄に大きなまなこ（目）、あるいは赤い口が開いている。あるいは、下駄から細い両手を出していたこともあった。けれども、いつものことなので、恐れることはない。

ある冬の夜、近所へ出かけて八つ時分（午前二時頃）に帰宅したところ、その夜は特別に寒い夜なので、寝室から火箱を出そうと、いそいで寝室をのぞくと、これはどうしたとどらう、火箱に目鼻口があつて、両手をついて、馬下を見て、にこにこ笑いながらのさばり出てきた。このときは、馬下も薄気味悪くなつて、茶の間へ出て、火を灯して見れば、いつもの火箱で、何の変わったこともなかつた。

また、秋のことであるが、ある夜八つ時分に、法泉寺の寺内を通りかかると、北の道下の窪んだところにすぎ場（手や口を洗い清める所）があつて、何やらいて、動くように見えたので、よくのぞいてみれば、とても年をとつた老女であつた。

馬下がのぞいて、「だれた」と言つと、老女は、

「私は御清水町の親類へ洗濯の手伝いに参り、暮れに戻つたところ、怪我をして転び、起さられずにおりました。ぶしつけながらお起こしくださいませ」

と言つので、馬下が手を出して引き起こしてみれば、その老女のやせていることは言いようもなく、面は茄子干しに目鼻ともいうよう形で、髪は揉み藁のようであつた。そして、

「これをまずお取りください」

と言つて、ぬれた小風呂敷包みをさし出す。その手の細いこと、鉄火箸のようであつた。

あまりに怪異な老婆なので、

「どこへお帰り」

と聞くと、

「鷹匠町へ」

と言つので、

「鷹匠町はどなたの」

と言つと、

「土手前」

と言つ。

馬下が思うには、「鷹匠町は、自分の住んでいる御守町の前の町である、土手前にこの様な姥のいる家はない」と。

また、

「土手前はどなたの家のばば様」

と聞くと、

「そのようにご尋問されては、ご同道はなりません。過分（ありがとう）」  
 と言って、かたわらの萱原へはね込んで消えてしまった。

馬下は、怪異なことだと思い、持っていたぬれた包みをほうり投げて、急いで家に帰った。

翌朝、わざわざあのところへ行ってみれば、投げた包みはぼろくずで、そこにあり、ほかに変わったこともなかった。

狐狸の化けたのは、しゃべらないか、言葉はわからないものだという。だが、このばば様の口上は勝れていて、さわやかで、様子はおとなしく、お歴々のかみ様（奥様）ともいうような口上だったということである。ぬれた布切れを持っていたので、獺が化けたのであろうか。

## 二

馬下何某、ある年五月、城下の東の方へ行つての帰り、夜半過ぎに馬場尻へかかつて、周防殿橋を渡った。小雨で、真つ暗の闇だったが、橋の下流のしがらみに何やらかかつているのが見えたので、近寄つてよく見れば、生まれたばかりの赤子が、手足を動かしているのが見えた。

馬下が思うには、「出生を妨げることさえ恐ろしいことなのに、たとえやむをえない訳があつて害すというとも、その始末の仕方もあるだろうに、まだ死んでもいない小児を物にもくるまらずに、ぐるむき裸（丸裸）にして投げ捨てる親心は、鬼ともいふべきか。世の中には、大胆な者もいるものだ」と、うたでく（気持ち悪く、嫌だと）思つて立ち去つたが、不安になつてふり返つてみると、あの赤子が、しがらみから二三間（四メートル程度）、のたぐつていた。

なお、うたでく思つて、小足早に土手の角まで来て、ふり返つてみると、赤子は馬下の跡を慕つて、土手の際までのたぐつていた。

馬下は気味が悪くて、急いで町へ入った。赤子は、跡に続いて間近く来るので、馬下は我が家へ走り込んで、藪を蹴りはねて、後ろの戸を閉めようと門口を見れば、赤子は続いたのたぐつて入ってくる。口は、耳の脇まで割れ、真つ赤で、柄の実のような両眼を見開いたありさまは、恐ろしくて、広間へ入つて、夜具を引つかぶつて、そつと藪の半戸を見ると、赤子は、すでに藪の半戸からのたぐつて、広間へ入った。

このとき、馬下は驚いて、アツと言つて、気絶した。そのとき、何やら上から落ちてきて、馬下の頭にながしと当たつた。これで気が付いて、幻のような心地がして、しばらくして目を開いて見ると、赤子も消えていなくなつていて、なにも変わったこともなく、鳥

の声がしきりにして、夜はほのぼのと明けていった。

枕元を見れば、上から落ちてきて頭に当たったのは、一万度のお祓い<sup>\*4</sup>であった。馬下は、不思議な思いがして、すぐに行水して身を清め、お祓いを押しただいて、元の棚へもどした。

そのお祓いの裏に「三七」とあったので、それから名を馬下三七と改めると、それ以後は、妖怪のようなことはなくなつて、これが、生涯の化け物の見納めとなつたということである。

化け物というものは、なければならぬもの、あればあるものである。

\*1 しがらみ 水の勢いを弱めるために、枕<sup>くし</sup>を打ちならべて木や竹を渡したものの。

\*2 のたぐつて のたうつて。ぬたうつて。泥の上をもがいてころびまわる。

\*3 部<sup>とく</sup> 格子の付いた上下に分かれた衝立<sup>つたて</sup>様の建具。屋内、屋外用のものがある。

\*4 一万度のお祓い<sup>はら</sup> 祓いの詞を一万度読んで罪を祓い清めた祓いのこと。江戸時代、年の暮れに、伊勢神宮から白紙貼りの祓箱に入れて信者の家々に配られた。

#### 四十四 若林源兵衛、大音のこと

今はむかし、元馬口<sup>もとばくち</sup>勞町の若林源兵衛は大男で、力量は衆に勝れた者であった。

若い時分、夜角力<sup>よづもろ</sup>が流行つて、方々へ人が集まつた。笹野<sup>ささの</sup>観音門<sup>かんのん</sup>前では、大地蔵の傍らの芝原に土俵を築いたので、毎夜あちこちから集まつた。

ある夜、源兵衛は若い衆と打ち揃つて、七軒<sup>しちけん</sup>町まで行つたが、南の方から来る者に、「今夜あそこで角力があるかどうか」と聞くと、その者は、「自分は大門の前を通つたが、何の音もしなかつた」と言う。

若林は、

「皆の衆は、ここで待っていてくれ。自分がちよつと行つて、角力がなければすぐにもどろう。あれば大声で呼ぼう」

と言って、脚立のような大股で、飛ぶようにして行つた。

行つてみると、原衆<sup>はら</sup>が集まつて、すでに相撲が始まつていた。源兵衛は、地藏堂の軒下から北に向つて、

「あるから来ーい、来ーい」